

幸せになるための人相術

——『神相全編』の受容からみる近世日本における相術観念

佐藤 実

はじめに

明治、大正、昭和の三代にかけて「観相とならんで骨相学界での元老だった⁽¹⁾」観相家、六代目石龍子^{せきりゅうし}（1880-1962）はその書『観相学大意』（誠文堂新光社、昭和十（1935）年）の「自序」において、つぎのように述べている。

夫れ本来相法を修むるは本身を治むるにあり。身治まれば家整ひ、家整へば国治まるの理なり。之を他に及ぼしては性格の善悪正邪、及びその運勢上に生滅する吉凶禍福寿夭を断じ、禍を転じて吉となし、難を未然に防止するの理を指揮軍配するの道なり⁽²⁾。

「相法」を修得することは本来的には自分自身を治めることである。そこから『大学』でいう「齊家治国」へと進んでいく過程において、人々の性格や吉凶・禍福・寿命のよしあしを判断し、その判断結果を決定論的なものとして指摘するのではなく、禍を吉に転ずるよう、あるいは災難を未然に防ぐように善導していくのが「相法」である。

つづけて石龍子はその「相法」を「観相学」といいかえたくて「観相学」とは「人生生存の上に幸福を与ふる修身齊家の指針」とであると定義している。観相学あるいはいわゆる人相術のことを中国では一般に「相術」とよびならわすので、本稿では相術と総称することにするが、幸せになるための相術とよぶうであろう。この言説は、決して近代になって突如うまれたものではない。冒頭で引用した「夫れ本来相法……」ではじまる文章は、じつは江戸時代に刊された『神心論相学發揮』（後述）におさめられている文章を引用にちかいかたちで書かれたものであり、かつ中国の相術解説書（以下、相書という）の思想を背景にしている。

本稿では幸せになるための相術、の内実を概観するとともに、近世日本の相術士たちが相術

(1) 『朝日新聞』東京版、1962年1月12日、11面の計報欄。

(2) 旧字体は新字体になおした。以下同じ。他書からの引用も漢字については新字体になおしている。

をどのようなものとして認識していたのか、その一端をあきらかにしたい。

1. 二代目・三代目石龍子による『神相全編』の解体

中国において相書の集大成ともいえるが、北宋の伝説的道士である陳搏^{ちんたん}（号は希夷）が伝え、明代の袁珙^{えんきょう}、号は柳莊^{りゅうそう}（1335-1410）、袁忠徹^{えんちゅうてつ}（1376-1458）親子が「訂正」したとされる『神相全編』⁽³⁾である。全十二巻、首一巻の比較的大部な相書で、顔の各部や手相の図版などが豊富に掲載されている。

日本では十七世紀の中頃に本書の和刻本が刊刻されたようだが、もっとも流布したのは三代目石龍子（藤原相栄）が、父である二代目石龍子（藤原相明）の命をうけて刪定したとかがえられる⁽⁴⁾『神相全編正義』（以下、『正義』と略称）である。文化三（1806）年の刊記をもつ本書は本家の『神相全編』全十二巻を上中下の三巻に節略した。上巻では顔部の部位分け⁽⁵⁾についての説明、中巻では眉、眼、鼻、耳、鼻、口それぞれの具体的な形についての、下巻では手相や黒子についての、いずれも図による説明が展開される。『正義』の特徴として、『神相全編』のテキストをただしく校訂しようとした点があげられる。文意が通らない箇所についてことごとく文字を加除訂正するほか、詩文については押韻する文字を一字一字指摘し（原テキストが押韻していないと判断した場合は押韻するように文字を訂正し）た結果が頭注にびっしりと列挙されている。また付された図についても「旧図は悉く非なり、今都之れを改む」など大幅な修正をこころみている⁽⁶⁾。こうして三代目石龍子の跋の言をかりれば「陳（搏）袁（柳

(3) 以下、『神相全編』『神相全編正義』『相法神心論』『神心論相学發揮』の書誌学的情報は三浦國雄氏による解題（三浦國雄『術数書の基礎的文獻学的研究—主要術数文獻解題 第三編—（平成21年度～平成23年度科学研究費補助金 基盤研究（C）研究成果報告書）』平成24年3月）65頁-71頁を参照。また江戸期の相術にかんする全般的な解説については青山英正氏の「古典知としての近世観相学—この不思議なる身体の解釈学」（『アジア遊学155 もう一つの古典知 勉誠出版、2012年）がくわしい。

(4) 『神相全編正義』におさめられた二代目石龍子の自序（文化二（1805）年）によると、袁珙、袁忠徹父子が『神相全編』を完成させたが、「但だ其の伝を広むる時、妄りに天機を洩らすを恐れ、文をして顛倒し、義をして反覆せしめ、或いは要訣を脱し、間ま隠語を雑う」内容であったため、師につかなければ理解できないものであった。そこで「乃ち家童に命じて之れを正し、劓顛に授け之れを公にす」（原文は訓点付きの漢文。引用の際には訓読して、送り仮名は平仮名で表記した。振り仮名については適宜つけておいた。以下同じ）とある。家童に訂正させたというわけだが、三代目石龍子の跋（文化元（1804）年）によれば「原本、謬り多く、読む者之れを苦しむ。……予、幸いに幼き自り家君の命を受け之れを読む。之れを読むこと久しくして頗る其の意を得たり。暇日、家君と与に討論参考して改正既に成る」とあり、父子の共同作業によって改定したことがわかる。さきの「家童」というのは「小童」「少童」といった息子を指す語であろう。父子による共同作業はまさに『神相全編』が袁父子によって編纂されたことを想起させる。

(5) 十二宮、三停など十二分割、三分割する。三停については後述する。

(6) 『正義』の図修正の意味する点については以前に拙稿「顔占いの顔のみかた」（『アジア遊学 特集 アジ

莊) 先生の本旨、粲然として明白」となったのである。

『正義』の存在はよく知られているのだが、じつは本書に先行する書を石龍子が刊刻していたことはあまり知られていないのではないか。『正義』の刊刻をさかのぼること三十年ほどまえの安永七(1778)年に石龍子は『神相全編』巻一の巻頭におさめられていた「純陽じゆんよう相法入門第一」「鬼谷子相弁微芒第二」「林宗相五徳配五行第三」「唐拳相神氣第四」「許負相徳器第五」だけを取りだし、『相法神心論』と名づけて刊刻する。この五篇はいずれも中国歴代の著名な相術士と目される人物に仮託した篇名となっている。第一から簡単に説明すると、純陽は唐代後期に活躍したとされる伝説的仙人である呂洞賓りどうひんの号。鬼谷子きこくしは戦国時代の人物で蘇秦、張儀(ともに諸子百家の縦横家)の師とされる。林宗は後漢の名士で、人物評で知られる郭泰かくたい あざなの字。唐拳は戦国時代の相術士で、のちに秦の宰相になる蔡沢さいたくの人相をみたことで有名。許負きよふも著名な相術士で、前漢の武将であった周亜夫しゅうあふの将来を予言したことなどがつたわっている。ともあれ、二代目石龍子は、まず『神相全編』の巻頭の一部のみを『相法神心論』という名前で刊刻し、それから三十年後に『神相全編』の残りの部分をさらに精選し『正義』として出版したことになる。『相法神心論』の意義については次節で検討したい。

さらに、二代目石龍子は『相法神心論』を出したその同じ年に『神心論相学發揮』(以下、『相学發揮』と略称)という書も刊刻している。これは『正義』の鈴木東安序にいう「龍法眼(石龍子のこと)先生、……嚮むかに神心論、發揮を著し」の「發揮」に相当する⁽⁷⁾ものだが、『相学發揮』に寄せられた官医である橘元周の序によれば、本書を著したのは久留米藩の侍医であった野田元隆げんりゅうであり、橘は野田に請われて序をしたためたという。実際に『相学發揮』巻一の冒頭は「南筑米府医官 野田元隆長勝輯撰」とあり、巻一の発端章では「(石龍子)先生常に言ふ、神相の道そのいまだ其原始きかずを發明せる事を不聞。ここに於て僕に命じて發揮せしむ⁽⁸⁾」ともあることから、本書は野田元隆が二代目石龍子に書くように命ぜられてなったことがわかる。ただし巻三の冒頭のみ「石龍子法眼鑑定 米府医官野田元隆長勝輯撰」とあり、巻三は石龍子もかかわっている。

その内容だが、巻一では「原始を發明」つまり相術の沿革について、中国の伝説の皇帝である黄帝から説きはじめ、巻二にはいと相家章では中国歴代の相術士につづけて日本は聖徳太子にはじまる(とかがえられた)相術士の歴史へと展開する。相談章では中国と日本における歴史上の相術エピソードが紹介される。ついで相学章では顔を区分する相書では定番の図が

アの心と身体』No. 110、2008年6月)で指摘したことがある。

(7) 原文テキストの「嚮著神心論發揮」の「神心論」と「發揮」のあいだの句点に注意し、これらが『相法神心論』と『神心論相学發揮』の二書であることを指摘したのは三浦前掲論文である。

(8) 原文は漢字かな交じり文。片仮名は平仮名になおし、適宜句読点や濁点をつけた。振り仮名については適宜つけておいた。以下同じ。使用したテキストは国会図書館蔵の享和二(1802)年補刻本。また補刻されるまえの安永七(1778)年刊刻の『相学發揮』は静岡県立中央図書館に所蔵されており、国文学研究資料館のHP上に写真データが巻二まで公開されている。

複数あげられ、その解説がつづく。特徴的なのはその後「^{だいけい}内経面部之図説」とあり、つづけて「五臓六腑見於面部之図」「肢節見面部之図」という医学色のつよい図が付されているということである。はたして巻三は中国医学のバイブルである『^{こうていだいけい}黄帝内経』（『^{そもん}素問』と『^{れいすう}靈枢』からなる）と『神相全編』の気色（顔色）にかんする篇からの引用を主にして構成され、いわゆる「望診」を中心に説くものとなっている。この『相学發揮』の意義についてもあとでみることにする。

以上のべたことを図示すればつぎのようになる。

〈中国〉	〈日本〉	
『神相全編』十二卷	{ 石龍子『相法神心論』二卷 石龍子・野田元隆『神心論相学發揮』三卷 石龍子『神相全編正義』三卷 }	安永七（1778）年
15世紀頃		安永七（1778）年
		文化三（1806）年

2. 『相法神心論』とその意義

さて先述したように『相法神心論』は『神相全編⁽⁹⁾』巻一の冒頭におさめられていた五篇（『神相全編』ではこの五篇のあとに別の文章がつづいていく）を独立させて、新たに書名をつけて刊刻されたものである。『神相全編』においてもこの五篇は「相法入門第一」「相弁微芒第二」とナンバリングされていることからわかるように、もともとひとまとまりの一連の作品としてあったとかがえられる。したがって石龍子がこれら五篇を独立させる下地はあったのだが、それらを刊刻した意図は奈辺にあるのだろうか。まずはこれら五篇の内容を検討したい。

各篇は七言の詩（第一から第四まではすべて七言律詩、第五のみ倍の分量の七言十六句）とそれに対する注釈という形式をとる。注釈は一句ずつに付されていて、各種典籍からの文章や人物の語を引用する引用注、さらに「秘訣」というコメントからなる。引用注には『周易』（とあるが、朱熹『周易本義』の朱熹注）や、北宋の陳搏や明の袁珙といった近世の人々の言をはじめ、相書とおぼしき書がひかれている⁽¹⁰⁾。

ここで注意したいのは篇題について記される人名のあとに付された「経解」と「玄解」という語である。最後の篇である相徳器篇の末尾に、全五篇をまとめる文章がつぎのようにある。

右五条相法、精無不該、粗無不載、囊括諸相法中之相、分^レ経^レ玄^レ二^レ解。泛視之、其辞簡約、深玩之、其理無窮。余珍之久矣、敢自私乎。公於同志。

(9) 使用したテキストは故宫博物院編『故宫珍本叢刊 命書相書』（第422冊、海南出版社、2000年）所収の道光五（1825）年経国堂刻本。また台湾大学書局からリプリントされた『神相全編』（2004年）も適宜参照した。

(10) 今後、詳細な研究が必要とされる。

五篇の詩が「経解」と「玄解」のふたつに分けられる。そこでこの二分類をもとに『相法神心論』の内容を概観することにする。以下に五篇の詩の部分あげる。

経解とされるのは相法入門篇、相五徳配五行の二篇、玄解とされるのは相弁微芒篇、相神気篇、相徳器篇の三篇。まず経解からみていく。

○相法入門第一 呂洞賓 経解

闕人先欲弃五形
次察陰陽精气神
三停八卦求相称
五岳四澆定高深
語默動静身須識
吉凶悔吝色当明
行年為主遠限決
相逐心生相術真

○相神気第四 玄解 唐舉

賦形天地超万靈
氣似油兮神似灯
油若竭兮灯焰熄
灯若明兮油潤之
落落失常無宅守
澄澄絕俗有根株
縱然形肉充盈実
氣散神枯虚穀子

○相弁微芒第二 鬼谷 玄解

大道無形無執着
揣摩簡練出其下
有時或在方寸間
有時或在郭廓外
空空洞洞本来真
彷彿難測度
消息只此箇中存
東周叔服豈欺我

○相徳器第五 玄解 許負

陰陽陶鑄幾般人
器識縁何分浅深
也有汪洋居台閣
也有輕盈処廟廷
輕盈薄識非遐福
汪洋大度可延齡
子輿嶮巖師万世
夷吾卑俠佐姜齊
此特公私毫髮間
出其下者無足評
福若水兮徳若器
器若浅兮水盈溢
得志崢嶸泯徳色
失時落魄絶狐媚
任是不颺難録取
心生相貌立鎡基

○相五徳配五行第三 経解 林宗

五行水火木金土
中蔵五徳通臟腑
水圓本是智之神
火有文武礼之附
木居東位仁發生
金方断制義自然
土定不移信常足
此為五徳配五行

相法入門篇は冒頭に「人を闕するに先ず五形を弃ぜんと欲す」とある。双行注に「金木水火土也」とあることから五形とは五行のことであり、まず人を五行に分類することから説きはじめ、ついで陰陽、精气神を観察し、三停さんてい(顔を眉より上、眉から鼻、鼻から額の三部分)や五岳ごがく(額、鼻、両ほほ、額の突起した部分。五大名山にたとえられる)、四澆しとく(耳、目、口、鼻の穴のくぼんだ部分。四大河川にたとえられる)をみていくことが説かれる。一方、相五徳配五行篇はその五行に配当された五徳(仁、礼、信、義、智)がそれぞれ五臓に宿っていることがのべら

れる。経解とは、まさに相術の経糸となる解説とみとめてよいであろう。ただし、どういう形が何を意味するのかという具体的な説明はなく、アウトラインをのべるにとどまる。

それにたいして玄解の内容的な特徴は、顔の部分の個別具体的な形を云々することはまったくなく、逆に形ではなく、徳や心のありかたを重視する考え方が目を引く。相弁微芒篇の冒頭では「大いなる道は形無く、執着すること無し」とあるように形に執着することは否定されているのである。そして相神氣篇は精神活動をになう神気について「たとい縦然形肉じゅうえい充盈して実なるも、きょかくし氣散じこ神も枯るは虚殻えい子なり」とあり、形としての肉体が充実していても、神気が散じて枯渇していれば空っぽの殻にすぎないことが説かれる。さらには相徳器篇では「福は水の若く、徳は器の若し。こ器若しえい浅ければ水盈溢す」とあり、徳という器が浅いと幸せはあふれ落ちてしまうとする。「玄」という字が玄学つまり道家思想を指し、ひいては奥深い真理を意味することもあわせて、相術という一見、外表を問題にする営みでありながら、逆説的に形の否定、内面の重視を説く言説として概括されたのが玄解であるとかんがえたい。こうした主張は、たとえば『莊子』の徳充符篇などが念頭にのぼる。徳充符篇におさめられた話柄はいずれも見た目の外形が醜い者がじつは徳を内面に充溢させているというものである。足斬りの刑にあった不具者である王駘おうたいが孔子よりも弟子を集めていたが、王駘は「形無くして心成る者か」つまり形としては現れ出てはいないが、心は完成している者、と評されている。またきわめて醜い哀駘あいたいだ它という男にたくさんの人々が惹かれる原因は「才まつた全くして徳あら形われざる者」才能が完全で、徳を奥深いところにあふれさせている者であるから、と分析されている。彼らの存在はまさに「世俗の人間の形骸に対する執着を打破し、真の徳とは形象を超えた高き内面性にあることを明らかにする」（福永光司『莊子 内篇』朝日文庫、1978年、214頁）ものであり、玄解の主張のベースにあるものといえよう⁽¹¹⁾。

ただし五篇の詩ではただ単に外形軽視、内面重視なのではなく、外形と内面は連関していて、心のありようによって人相が変化するという「そうちくしんせい相逐心生説⁽¹²⁾」が説かれる。劈頭の相法入門篇は経解に属するが、「人相は心のありようによって生じる、というのが相術の真諦である（相

(11) 江戸期における相術の老莊思想の浸透については拙稿「書評 松井真希子著『徂徠学派における『老子』学の展開』人相術のなかの老莊思想」（『国文 研究と教育』（奈良教育大学国文学会）37号、2014年）を参照。なお「玄解」について、昭和十四年、十五年に出版された谷村春樹『評注神相全編稿本』（八幡書店、2015年復刻）も「老子の思想に準拠したる解説なる故、斯くいふ」とする（神相全編卷一、6頁）。ただし「経解」については「礼記中の一編名よりとれり。蓋し五行説は礼記に基けるものなるにより、経書の解説という意なり」（同1頁）とする。

(12) 拙稿「心のありようによってかわる人相について」（『大妻比較文化』第17号、2016年3月）を参照。なお倫理的正しさが外形に現れることの経書の根拠としては『大学』伝第六章「此謂誠於中、形於外。故君子必慎其独也」や『中庸』二十三章「誠則形」、『孟子』尽心上「君子所性、仁義礼智根於心。其生色也、睟然見於面、盎於背、施於四体、四体不言而喻」など、枚挙にいとまがない。この考え方は、音楽や書が人の内面にある心を表す、といった楽論や書論をはじめ、ひろく芸術理論にもつらぬかれる思想である。そしてそれは現代のわれわれのものの方にも通底する。

逐心生相術真)」という句でおわっている。この句と呼応するように最後の相徳器篇の末句つまり第十六句は「心のありようによって相貌が生まれるので、心に鋤を入れて耕すべきである(心生相貌立鎡基)」と結んでいる。この末句の注では陳搏の「心、善端を発すれば、諸福集まる」ということばが引かれていて、心に善の兆しが芽ばえれば、幸福があつまるという。つまり、この『相法神心論』として別出された五篇の詩の中心となる主題として相逐心生説があるといえよう。

このことは石龍子門下たちも認識していたであろうが、かれらの相逐心生説にたいする受けとめ方は独特であった。以下、石龍子の弟子であった吉田素琴、中林梅山の『相法神心論』の要旨かつ解説である⁽¹³⁾「相法神心論要言五条」(『相学發揮』所収)をみってみる。その第三条に つぎのようにある。

一、夫相法を学ぶ事は^{それ}本身を治むるにあり。身治れば家ととのふ。家ととのへば国治るの道にして、次ではこれを人に及ぼして、善悪邪正疾苦災難を未然に示す。然れば陰隲^{いんしつ}の本来、陽報の根帯ならずや。……

「はじめに」で引用した六代目石龍子『観相学大意』「自序」はこれを下敷きにしているのだが、ここでは占う側の問題として、相術が『大学』の「修身齐家治国」を体現するものとして観念されている。それはまず本身を修(治)めることにつながる。なんとなれば相術は他人に善悪邪正疾苦災難を未然におしえることであり、それは陰隲つまり人知れず善行をほどこしたことになるからである。中国の宋代以降、^{たいじょうかんとうへん}『太上感應篇』や^{いんしつぶん}『陰隲文』といった勸善書が流行する。そこでは、人の吉凶禍福はみずからがまねくものであり、人がみていなくても善行を実践し徳をみがくことで幸せが招来することが説かれる。この勸善思想の流行が相術の相逐心生説とかわることはこれまでも指摘されている⁽¹⁴⁾。ただし勸善思想の影響をうけた相逐心生説をかんがえる場合、善行によって人相が変わり、その結果幸せになるというのは占われる側一般にたいしていわれるのであって、占う側の問題ではない。そうした意味で、占う側にとって相術の実践がそのまま陰隲につながるという思想は独特であるといえる。また第五条にはつぎのようにある。

一、相法にて当時の吉凶を云はば、水難の相^{あらわ}顕るるときは水厄を防^{ことわ}の術を断り、病難の相見ゆれば病を除の薬治を致すべし。是れ其の濁心を去り、清真を養ふ時は其の災を転ずるの理なり。又一生涯の吉凶を云ふときは、仕官の相には仕官をすすめ、商人の相には商人を^{より}はげます事、其の相に因て人心善に帰することを教ゆるの術なり。唯其の本は其の身を

(13) 三浦前掲論文70頁。

(14) 小川陽一「人相術」(『道教の大事典』新人物往来社、1994年)に言及がある。また注12拙稿を参照。

まつと
全ふする、未然を示すの道にて、儒家の性善を第一と研窮するに同じ。

吉凶占断において、それが短期的なものであれ長期的であれ、相者は「其の身を全ふ」して「未然を示すの道」を根幹におかねばならない。ここでも占う側の修養が問題となっている。そして、それは儒家が善である本性を涵養することとおなじであるという（「研窮」には「ミガク」とルビがふられている）。どういうことか。つづけていう。

然れば思ひ内にあれば色外にあらはるるは心相なり。思ひ内に無きことを外にあらはすは是れ神相なり。天地の吉凶神にあらずして知ることなしと云へば相者の内心敬を第一に致して、心頭少しも邪意あることなく、清浄潔白にして、人を鑑すること水鏡の如くならん。又未発の吉凶は神相にあらずんば知ることなきなり。未発の吉凶を察せずんば相を見る事益なきに似たり。惣じて未然を察することによりて慎をも致すなり。故に神相を鑑して慎を全すべし。慎全からざれば凶を転ずることなりがたし。爰を以て世の学者の為に先生心を専にして神心論を改正するのみ。

「心相」と「神相」の定義が興味ぶかい。「心相」は人の心の内にある思いが表にあらわれたものであるのにたいし、「神相」は思いとは関係なく外にあらわれてくる現象のこと。「天地の吉凶」つまりこの世界でおこるあらゆる出来事は個人の思いがおよばないところにあらわれてくる。そうしたあらわれを「神相」とよんでいるのである。ともあれ、その「神相」を知るためには占う側の心は儒教でいう「敬」つまり常に覚醒した状態において、なおかつ「清浄潔白」にして鏡のような状態にしておかねばならない。「敬」に身をおくこと、これが「儒家の性善を第一と研窮するに同じ」の一側面である。

くわえてもうひとつ儒家の研窮がある。それは「未然を察する」ための「慎」である。儒家で「慎」といえば『中庸』の冒頭にみえる「慎独」のこと。「道なる者は須臾も離るべからざるなり。離るべきは道に非ざるなり。是の故に君子其の略ざる所を戒慎し、其の聞かざる所を恐懼す。隠より見わたること莫く、微より顕らかなること莫し。故に君子其の独を慎むなり」とあるように、人が実践すべき道は一時たりとも離れてはならない。離れるようであればそれは道ではない。ただしその道はこういうものですよというかたちで見えたり聞こえたりするものではないので、君子はつねに「戒慎恐懼」していなければならない。また「隠より見わたること莫く、微より顕らかなること莫く」隠微ではあるが兆しはあらわれているのであって、その兆しを自身（独）が認識している状態においてはより慎重であらねばならない。かすかな兆しはあらわれているときにあるべき人の姿勢として「慎独」がある⁽¹⁵⁾。その「慎」が占う側に求められるのである。

(15) さらにこの「慎独」は『大学』伝第六章では「小人閑居為不善、無所不至、見君子而后厭然、揜其不善、而著其善。人之視己、如見其肺肝然、則何益矣。此謂誠於中、形於外、故君子必慎其独也」とあり、小人は

以上、「相法神心論要言五条」からみえてくるのは、占うことが『大学』にいう「修身齐家治国」の実践であるということ。占うことは人に福を与える行為であり、福を与える行為そのものは陰陽であり自身の陽報につながるということ。そして、占うにあたって自分自身は「敬」「慎」という中国的にいえば士大夫的な修養をおこなわなければならないということ。重要なことは、以上のことがらを石龍子門下たちが五篇の詩から読みとった、あるいは引きだしたということである。五篇の詩そのものは占う側の占う意義を直截に説いているわけではないし、ましてや「敬」「慎」といった修養論もでてこない。相逐心生説の展開としてとらえるのであれば、「相逐心生」の「人相は心のありようによって生じる」という本来の意味にくわえて、「(人相を)相ることは相る側の心のありようによって占断の良し悪しが生じる」と読みこまれたとかがえることもできる。つまり相逐心生説が占う側の問題として立ち現れたといえるのである。

本節をしめるにあたって、もう一点だけ五篇の詩の特徴をあげておくと、注で引用される各種典籍に医書がみえるということである。たとえば相弁微芒篇の第四句に『靈枢』と東晋の葛洪が著した急救のための薬調合集である『肘後備急方』が、相神氣篇の第一句に『靈枢』、第五句に『肘後備急方』、第六句に『肘後備急方』が引用されている。次節以降のように、医書の引用は石龍子門下にとって重要な意味をもつ。

3. 『神心論相学發揮』と中国伝統医学

『相学發揮』は先述のように久留米藩の侍医であり、石龍子の高弟であった野田元隆が石龍子に命ぜられて著したものである。そもそも医者であった野田元隆がなぜ相術士である石龍子に弟子入りしたのか。『相学發揮』巻一・發端章の後半は野田元隆の自序のような内容になっている。それによると、專業のかたわら『黄帝内経』（『素問』と『靈枢』の二系統のテキストとしてつたわる）を数年間読みこむうちに、黄帝の臣下である岐伯が色脈を論じた章のところで、色脈とは「神相」のことで、さらには中国医学の基本となる診断法である四診（望、聞、問、切）も「神相」ではないかと思うにいたる。そこで何人かの相術士に相術のことをたずねるが一長一短で要を得ない。そうこうしているうちに江戸に石龍子先生がいるということを知りつけ、「歎躍の至りにたへず」弟子入りした、という。「神相」とは、つづく文章で石龍子の相術を評して「神心の妙を極め玉ひ」とあるように、神心の妙を極めた相術のことを指すのであろう。

岐伯が色脈を論じた章というのは恐らく『靈枢』邪氣臟腑病形篇である。邪氣臟腑病形篇では顔の色と脈象（脈のパターン）が対応していて、さらに五臓と連関する各脈それぞれの脈象

不善を隠して、善を見せようとするものだが、人からみれば肺や肝臓をみるようにばれてしまう。これを世の中では「中に誠なれば、外に形わる」という。だから君子はかならず一人にいるときも慎む、といわれる。さきの「心相」「神相」でいえば「心相」に相当するが、「慎独」と内面・外面との関連がみてとれる。

に、ある疾病が対応していることがのべられている。またこの色脈についての解説の冒頭は、黄帝が岐伯にたいして「余、之れを聞き、其の色を見て其の病を知る、命づけて明と曰う。其の脈を按じて其の病を知る、命づけて神と曰う。其の病を問いて其の処を知る、命づけて工と曰う、と。余願わくは、見て之れを知り、按じて之れを得、問いて之れを極むるは、之れ奈何と為すを聞かん」という言葉からはじまっている。患者の顔色や皮膚の色をみて（望診）、あるいは脈をみて（切診）病気を知る、そして病状をきいてみて（問診、聞診）病んでいる部位を確定する、これら三者が発揮された状態はそれぞれ明、神、工と名づけられ、理想的な診断法としてつたわっていた。その具体的な方法を黄帝が岐伯にたずねる、というのが邪氣臟腑病形篇のプロットである。

野田元隆は、色脈を「みる」ことによって病状を把握し、治療していこうとする営みは、まさに「みる」ことによって未来を知ろうとする相術とパラレルであると考えた。『相学發揮』巻三の最後で野田元隆はつぎのようにいう。

按ずるに夫れ内経は医家の宗師、後世これに拠らざるものなし。内経に論ずる色脈は即ち観察なり。色脈は是れ神相にて、観察是れ相法なり。

「観察」の二字には「イロヲミルコト」というルビが付されている。色脈というのは色をみることであり、それは相術でいえば、神心の妙を極めた相術とはやはりみることである、となる。

色脈 = 観察 : 医学

↓ ↓

神相 相法 : 相術

ここで重要なのは、『黄帝内経』の絶対的な評価を前提にしているということであり、野田元隆としては一貫して医者立場から相術にアクセスしていたことがみてとれることである。つづけて「医を学ぶもの相法に達せずんばあるべからず」とまでいきっていることもその証左である。

さて、石龍子に弟子入りした野田元隆は相学に専心し、あるレベルまで会得したことをみずから了解したところで、石龍子に色脈とは神相のことではないのかという積年の考えをうちあけると「平生の疑惑、一時に開け、誠に雲霧を披きて青天白日を観るが如し、の思をなせり」。石龍子がどのように答えたのかは明言されていないが、野田元隆の説を良しとしたことはまちがいない。いや、それ以上に石龍子とその門下にとってこの相術と医学を結びつける思想は新機軸になった。およそ三十年後に刊刻された『正義』に付された序や凡例にはこのかんがえかたが色濃くみられる。たとえば、さきにみた鈴木東安の『正義』序は「龍法眼先生……嚮に神心論・發揮を著し」につづけて「医相一般の大意を詳述す。是れ千古未発の確論、後世色脈の

規範なり」とのべる。「医相一般」つまり相術と医学がおなじであること、このかんがえかたが「千古未発の確論」であることが高らかに宣言されている⁽¹⁶⁾。ここで主語は龍法眼先生つまり石龍子になっているが、『相学發揮』を実際にかいたのは野田元隆であるし、「医相一般」のアイデアはやはり野田元隆に帰すべきであろうとかんがえる。さきほどの『相学發揮』巻一・発端章で野田元隆は「色脈は神相なることを悟る。……さは言へども古人の註家も色脈は相なりと云ふ發明もなければ、中々僕が如き陋見浅智も及ぶべき事にあらざれば、疑をここに致して止ぬ」とあるように、野田元隆にとって「医相一般」は大発見であった（のだが、確信できなかったのだから石龍子の門をたたいたのである）。鈴木東安『正義』序いがいいにも「夏殷の間、医相を分かつたず」（石龍子自序）、「是れ色脈相法一般の明証なり。嗚呼、相学の医道に關係するや其の功甚だ大なり。後人悞りて両端と見る事勿かれ⁽¹⁷⁾」（石孝安凡例）などがあり、「医相一般」は石龍子門下の定説となっていたとみてよいだろう。付言するならば、前節の末尾で言及したように『相法神心論』の注釈に医書が引用されていたこともこうした思想の裏付けになったことであろう。

そうした意味で、『相学發揮』の巻三はその真骨頂といえる。巻三の内容は冒頭に「内経面部部位之図」という図があり、以下「内経面部部位図説」「色脈略論并病相口訣」「面部気色出没吉凶弁」「病相口訣生死秘伝」の四篇がつづく。各篇の出典をまとめるとつぎのようになる。

表をみるとわかるように、巻三は『神相全編』と医書の引用によってできあがっている。医書は『黄帝内経』（『素問』と『靈枢』）が主だが、唐の孫思邈^{そんしほく}『千金要方』や明の李挺^{りてい}『医学入門』なども引かれている。吉凶については（「面部気色出没吉凶弁」）『神相全編』が、疾病や生死について（「病相口訣生死秘伝」）は医書がそれぞれ分担していることもみてとれる。「病相口訣生死秘伝」に石龍子のことがみえるが、巻三の冒頭のみ「石龍子法眼 鑑定」とあるのはこのためかもしれない。引用されている『神相全編』についていえば、巻十一と巻十二がおおい。三浦氏が疑問を呈されていた、『正義』では序文や凡例ではあれほど「色脈」を重視しているのに、気色論が中心となる巻十一、巻十二がなぜか全巻カットされているという

(16)「後世色脈の規範なり」というのは、医者を選発しかねない言説だが、これも医者である野田元隆が提示したからこそいえるものであろう。また『相学發揮』には『内経氷鑑』という書について言及がある。たとえば巻三・二六葉に「按ずるに内経の内、色脈相法を論ずること枚陳に遑あらず。この外……（『内経』の篇名が十あげられる）に詳らかに。今ここに贅せず。尚を内経氷鑑の内に於て論ぜり」、巻三・二九葉・三〇葉に「五色の説は内経一部の骨子、……なお内経氷鑑の内に於て詳らかに論ずべし」とある。「氷（氷鑑）」とはもと氷室のことをさすが、事物をありのままに写しだす鑑ということで相術を意味するようになった語である。『内経氷鑑』という書名はまさに「医相一般」を体現するものである。ちなみに、太平天国の乱の鎮圧に尽力した曾国藩はその名も『氷鑑』という相術書を著したとされ、いまでも中国の書店で平積みで売られていたりする。

(17)「後人悞りて両端と見る事勿かれ」からは逆に、一般的には相術と医学は別ものとしてみられていたことがわかる。そうであろう。

(18)『素問』刺法論篇は『素問』のなかで遺篇とされるもので、宋代になって作られたとされる。

篇名		出典
内経面部位図説		『靈枢』五色篇、論勇篇、本神篇
色脈略論并病相口訣	唐一行禪師曰	『神相全編』卷十一・気色論
	陳凶南曰	『神相全編』卷十一・希夷氏気色論
	又曰、気色或は	『神相全編』卷十一・又気色論、気色生死脈候
	又曰、気は乃	『神相全編』卷十二・神気雜論
	又曰、気の人	『神相全編』卷十二・気神之母、肉虚無気、肉実有気
	又曰、天一生水	『神相全編』卷十二・気色骨肉生死訣
	按ずるに素問	『素問』脈要精微論篇、『靈枢』論疾診尺篇、『素問』五臟生成論篇
	神相全編	『神相全編』卷十一・論色類
按ずるに論疾	『靈枢』論疾診尺篇、経脈篇、決気篇、調経篇、刺法篇、本病篇、天年篇	
面部気色出没吉凶弁	神相全編	『神相全編』卷十一・面部気色出没吉凶歌
	年上白色	『神相全編』卷十一・白色吉凶相
	眉上月角黒	『神相全編』卷十一・黒色吉凶相
	黄色帯の如く	『神相全編』卷十二・黄色吉凶相
	天庭の紫気	『神相全編』卷十二・紫色吉凶相
	馱馬の赤色	『神相全編』卷十二・赤色吉凶相
病相口訣生死秘伝	陳希夷秘伝	『神相全編』卷十二・訣病生死
	素問を按ずるに	『素問』五臟生成論篇
	素問に又曰	『素問』拳痛論篇
	孫思邈が千金備急方に	『千金要方』卷五・少小嬰孺方上・初生出腹
	素問三部九候論	『素問』三部九候論篇
	玉機真蔵論	『素問』玉機真蔵論篇
	靈枢寿夭剛柔篇	『靈枢』寿夭剛柔篇
	素問方盛衰論	『素問』方盛衰論篇
	寿夭剛柔篇	『靈枢』寿夭剛柔篇
	五閱五使	『靈枢』五閱五使篇
	五色篇	『靈枢』五色篇
	診要経終篇	『素問』診要経終論篇
	刺法論	『素問』刺法論篇 ⁽¹⁸⁾
	天年篇	『靈枢』天年篇
	玉版論要篇	『素問』玉版論要篇
	刺熱篇	『靈枢』刺熱篇
	靈枢賊風	『靈枢』賊風篇
	衛気失常篇	『靈枢』衛気失常篇
	五音五味篇	『靈枢』五音五味篇
	寒熱篇	『靈枢』寒熱篇
	石龍子先生曰	
	医学入門曰	『医学入門』小兒門・死証

問題⁽¹⁹⁾は、『相学發揮』にすでにおさめられていたからであるとこたえられよう。つまり本家の『神相全編』は、石龍子らによって相術マニュアルの『正義』、勸善という倫理的側面を中心とする『相法神心論』、そして医学とのかかわりを前面に打ちだす『相学發揮』の三書に解体されたといえる。

4. 相術は医学か占いか

ところで「医相一般」の思想がもたらす新機軸性は、相術がたんなる占いとはことなる、という点にあるとかがえられる。さきの『相法神心論』でも主題となっていた心のありようによって人相が変化するという「相逐心生説」が『相学發揮』でも説かれていることを確認しておく。たとえば巻二・相談章には、

これ（短命貧賤の凶相）を転じて長命富貴の善相とするものは、徳を修するにあり。徳を修することは陰隲の事なり。学問の上にもあり。^{あに}豈何ぞ貧薄天賤なりとて悲しむべきにあらず。

とある。凶相であったとしても善相になりうる。それは徳を修めることによって、具体的には陰隲つまり人知れず善行をおこなうことによって、さらには学問を修めることによって相は変化するという。また善行を積むことによって善相になることを、つぎのように「換骨」とよんでいる。

然りといへども^{かくのごとく}如此善惡邪正榮衰禍福を定むと云ふとも、これを僻して一代の定相として悲むことな^{えきにいわく いんとくあれば ようほうあり}かれ。易曰、在陰徳則在陽報云云、又曰、積善の家には余慶あり、積不善の家には余殃ありにて、凶相も一善事によりて好相となり、善相も^{かえつ}邪意あれば却て凶相となる。これを換骨の相と云へり。（巻二・相学章）

^{しか}然し其人々の陰隲により窮通の骨相も善相となし、是を換骨と云。（巻二・面部位之図説）

幸不幸を運命論としてとらえるのではなく、自身の主体的な倫理実践によって幸福を獲得できるとかがえる姿勢は、これも、現在の病状にたいして手をこまねくのではなく（そういう場合もあるが）、医師あるいは患者が主体的に治療したり生活実践に配慮したりすることで健康を回復できるとかがえる態度とパラレルであるともいえる。

(19) 三浦前掲論文68頁。

さて『相法神心論』と『相学發揮』が刊刻されておよそ三十年後に『正義』が上梓されるが、これまで再三のべてきたように『正義』では序跋において「医相一般」が説かれていた。『正義』がこうした相術と医学の関連性を強調する背景には二代目石龍子が土御門家から訴えられたという事件がある⁽²⁰⁾。前掲『観相学大意』によれば、『相法神心論』と『相学發揮』が刊刻されると、土御門家の関東三十三ヶ国総奉行であった吉村権頭ごんのかみが出版禁止を申し渡したという。当時、吉凶禍福をうかがう卜筮つまり占いは陰陽学の名のもと土御門家が監督していたが、その許可を得ずに出版し、かつ営業をしていることが問題視された。観相は陰陽道であり、『周易』に端を発するというのが吉村権頭の主張であった。それにたいし二代目石龍子は、観相学は医書を淵源とするものであり、四診のとくに望診の延長線上にあるということで抗議した。それをうけて吉村権頭が安永八（1779）年九月一二日、石龍子と野田元隆を寺社奉行に公訴した。「土御門家よりは観相が周易に属する証拠をあげしめ、我が中祖（二代目石龍子のこと）には、観相を医学に属すべき事の証拠をあげさせられた」（同書11頁）。

はたして寺社奉行太田備後守の判決は、『観相学大意』によれば以下のとおり（同書11頁-12頁）。

- 一、石龍子町医師かまいなし無構。
- 一、吉村権頭 脉すい脉かど道い医どうと天停てんていの事をも計らず、金銀を貪り、不埒ふらちの至り、因って押籠三十日、一件おわ畢りて土御門家より、役義とりはな取離し、流浪。
- （中略）
- 一、野田元隆異議無し。
- 一、「相法神心論」医書に相違ちがひなし、以後うりひろ宥弘め勝手たるべし。
- 一、「相法發揮」、同前。

石龍子側の完全勝訴であった。お上にお墨付きをいただいたことは、石龍子の相術をして江湖に知らしめるに充分であったとかがえられるが、ここでは判決文から気付く点をいくつか指摘しておく。

まず確認したいのが石龍子は「町医師」となっていて、『相法神心論』『相学發揮』ともに医書として認定されたということ。『相学發揮』はさきに見たようにとりわけ卷三は医書によって構成されているので首肯しやすいが、『相法神心論』のほうはいまのわれわれからすると医書と断言するにはややためられる。ただし、逆に相書のイメージもうすく、かつ注釈には医書の引用もあることから、どちらかといえば医書ということなのかもしれない。もうひとつ確認したいのは、吉村権頭への判決である。吉村がどれほど金銀を貪ったかはわからないが、か

(20) 中山茂春「石龍子と相学提要」（『日本医史学雑誌』第55巻第3号、2009年）に言及がある。この中山論文には六代目石龍子の『観相学大意』の紹介もあり参考になった。

それは「阡阡道医道と天停の事をも計ら」なかった。「阡阡道」つまり陰陽道と医道はいずれも「道」として、ひとつの体系として認定されているのにたいし、相術は「天停の事」とよばれているにすぎない。天停とは顔を垂直線上に三つに区分（先述の三停という）したときの上の部分、額のことであるが、呼称として一定の語（相法や相術など）があたえられていないのである。それが当時の人々の相術にたいするみかたであったのであろう。

ともあれ相術は卜筮ではなく医学であると公的に認められたことになる。それから三十年後に刊刻された『正義』の序文が「医相一般」を強調するのは当然その判決をうけてのことである。『正義』だけを見るならば、図解された相術マニュアルであって医学臭はほとんどしないが、医学方面は『相学發揮』（さらには『相法神心論』）がになっているのである。

こうして相術は卜筮ではないと判決をうけた石龍子ではあるが、その家号である「石龍子」じたいがトカゲを意味し、そのトカゲの象形字が、まさに決別せんとした卜筮の淵源である『周易』つまり「易」字であることは皮肉である。あるいは、南方のトカゲつまりカメレオンは色を変えることから「易」字にかわる変易の意味があるという説をふまえれば、石龍子は自由自在に変化する、ともいえる。ちなみに『周易』はThe Book of Changesと英訳される。

おわりに

幸せの内容について、中国の伝統的漢籍の影響にある地域的にいえば、まず思いおこされるのが『尚書』洪範の「五福」の概念である。

五福。一に曰く寿、二に曰く富、三に曰く康寧、四に曰く好徳おさを攸む、五に曰く終命まを考つ。

一と三と五はそれぞれ長生き、健康、天年を全うすることであり、いずれも病気やいのちにかかわる問題である。これらは「医相一般」を直接に説く『相学發揮』がなうものであった。四は「善徳を修めた名誉⁽²¹⁾」であり、倫理的行為を實踐することが幸せの一つにかぞえられている。これについては相逐心生説を主題とし、勸善思想を説く『相法神心論』がうけおっている。そして二の富については『正義』があついているといえよう。

十五世紀に中国で編纂された『神相全編』を、十八世紀末から十九世紀初頭にかけて江戸の石龍子たちは三つの書に解体して受容した。その際、相術をただ単に人相占いということではなく、医学と関連づけて健康で長生きするという他者の幸せを目指すものとしてとらえた。あるいは中国の相術由来の相逐心生説を換骨奪胎して、相術そのものを自身の倫理的修養としてとらえた。つまり、人が幸せになるよう導くことを自身の幸せとし、そのために心を常に覚醒させ極めて慎重に他者と接する。こうした自他が幸せになるための相術、まさに「身治まれば

(21) 赤塚忠『書経・易经（抄）』中国古典文学大系、平凡社、1972年、201頁。

家整ひ、家整へば国治まるの理」として相術が石龍子たちによって構想されたのである。

*本研究は、JSPS 科研費 25370026, 25370083 の助成を受けたものである。